Die Nibelungen von Friedrich Hebbel

Eisaku ISHIKAWA

Abstract


序

十八世紀半ばに『ニーベルンゲンの歌』の写本が再発見されて以来、ニーベルンゲン伝説はようがえり、実に多くの詩人・作家たちによってさまざまな芸術形態で伝承されていった。特に十九世紀にはニーベルンゲン伝説の戯曲化が目立っており、その数は枚挙にいとまがないほどである。それら多数存在している戯曲作品のうちでも特別な光を放っているのが、フリードリヒ・ヘッベル（Friedrich Hebel, 1813-63）の悲劇『ニーベルンゲン』（Die Nibelungen）三部作である。

ヘッベルは少年時代に北海近くの故郷ヴェッセルブルークで初めてジークフ

1) 1755年に『ニーベルンゲンの歌』の写本（現在写本Cと呼ばれている）がフォーアルベルクで発見されたのを皮切りに、1769年には写本Bがザンクト・ガレンで、1779年には写本Aがフォーアルベルクで発見されるなど、その後も完本・断片を含めて三十以上の種類の写本が発見された。（他著：『ニーベルンゲンの歌』—構成と内容—郁文堂1992年2-3頁参照）
2) 次の二つの文献における戯曲化の作品目録を参照されたい。
ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

リートとクリームヒルトの物語を読んだら推定されるが、その後その伝説に再会するのは1835年にハンブルクへ移ってからである。彼はこの女流作家アマーリエ・ショッペの図書館でニーベルンゲン素材を見つけてから4)，長い間その伝説の戯曲化を考えていたが、しかし実現されるには至らなかった。その戯曲化の執筆に取りかかるきっかけとなったのは、ずっとのちの1853年ウィーンのブルク劇場において彼の妻クリスティーネがエルンスト・ラウパッハの戯曲『ニーベルンゲンの財宝』5)でクリームヒルト役として登場したことである。この演劇によって少年時代からの夢が復活し、彼は1855年10月にその戯曲化に着手し、初稿を経たのち、五年後の1860年3月22日に三部作——第一部『不死身のジークフリート』、第二部『ジークフリートの死』及び第三部『クリームヒルトの復讐』——を完成させたのであった6)。その第一部と第二部はフランツ・ディンゲルシュテット監督の下で1861年1月31日にワイマールで上演され、三部作全体は1861年5月16日／18日同様にワイマールで作者の面前で初演された7)。成果はいずれも輝かしいもので、その後1862年にはベルリンでも、1863年にはウィーンでも好評を博した。また1862年にはテクストがハンブルクのホフマン＆カンペ社から出版され、それにより翌1863年11月7日——病没する約1ヶ月前——にはシャラー賞を受賞している。

完成した戯曲作品としては最晩年に属するこの『ニーベルンゲン』三部作の創作過程については、遺稿の「読者に寄せて」8)の中で明らかにされており、それによれば、「この悲劇作品は『ニーベルンゲンの歌』の劇的素材を実際の舞台にのせるという目的のもとに書かれた」もので、「悲劇の要因はすべて原作の叙事詩によって与えられ」、自分の「課題は今やそれを戯曲的に組み立て、必要なところで詩的に活力を与えることであった」という。しかし、ヘッベルは素材の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』をそのまま翻案したわけではなく、戯曲化に伴ってかなりの改作を施していることは言うまでもない。必要に応じ

6) 上記レクサム版テクスト巻末の解説190頁参照。なお、以下の訳詞もこの解説に指摘されているが多い。
7) 谷口茂編著：内なる声の軌跡——悲劇作家ヘッベルの青春と成熟——富山房1992年324-7頁参照。
8) 上記レクサム版テクスト巻末の解説191-2頁参照。
ては北欧伝承も取り入れ、また全体の悲劇を三部構成にして、新たな登場人物をも導入することによってヘッヘル流に作り直している。その結果、中世の英雄叙事詩とは著しく異なった世界観が展開されていることもまた事実である。ヘッヘルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作は、一体、『ニーベルンゲンの歌』と比較してどのような特徴を示しているのであろうか。本稿では特に素材の中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と比較しながら、必要に応じて北欧伝承をも引き合いに出しながら、ヘッヘルの戯曲『ニーベルンゲン』三部作の特質を探り出すことにしたい。

第一部『不死身のジークフリート』

I. ライン河畔ヴォルムスの城——第1場—第2場——
第一部『不死身のジークフリート』は4場から成る一幕物であり、それぞれ五幕から成る第二部『ジークフリートの死』及び第三部『クリームヒルトの復讐』に比べるとかなり短い。ここではニーデルラントの英雄ジークフリートがライン河畔ヴォルムスに到着し、ブルゲント族のグンター王と契約を交わすまでの経緯——ニーベルンゲン伝説ではよく知られたあらすじ——が取り扱われているが、その中にはジークフリートの冒険とブルンヒルトの物語も織り込まれていて、この第一部はまさに三部作全体の序曲（Vorspiel）の役割を果たしていると言ってもよかろう。

その第一部冒頭の舞台はライン河畔ヴォルムスのブルゲント族グンター王の居城である。復活祭の早朝、ブルゲント族の面々が居並ぶ中でハーゲンが狩りを催さないことに不平を述べる中、グンター王が退廃しのぎに何かおもしろいことを話して聞かせるよう楽人フォルケールに要求することからあらすじは展開し始める。ハーゲンはこの戯曲ではグンター王の伯父として登場しているが、とりわけ重要な役割を果たす人物であることは『ニーベルンゲンの歌』と異なるところはない。中世叙事詩においてと同様、ハーゲンが退廃の英雄ジークフリートについてすでに聞き及んでいることは、その場面での会話（91-4）からも明らかである。たださすがの知恵者ハーゲンでも世界の北のごてに住むブルンヒルトについては何も知らないことになっている。その顔にはルーネ文字が書かれている（127）というブルンヒルトについて語るのが楽人フォルケールである。この人物は『ニーベルンゲンの歌』では後編になってようやくその本来の楽人ぶりと勇猛ぶりを発揮しているのに対して、ヘッヘルの作品ではこの第一部冒頭すでに重要な役割を演じ、これまで一度も話したことのない
北方の美しい女王ブルンヒルトについて次のように語るのである。

･･･Sie wohnt
In einer Flammenburg, den Weg zu ihr
Bewacht das tüchtische Geschlecht der Zwerge,
Der rasch umklammernd quetschend Würgenden,
Die hören auf den wilden Alberich,
Und überdies ist sie begabt mit Kräften,
Vor denen selbst ein Held zuschanden wird. （141-7）

･･･Wer um sie wirbt, der wirbt zugleich
Um seinen Tod, denn führt er sie nicht heim,
So kehrt er gar nicht wieder heim, und ist
Es schon so schwer, nur zu ihr zu gelangen,
So ist es noch viel schwerer, ihr zu stehn.
Bald kommt auf jedes Glied an ihrem Leibe
Ein Freier, den die kalte Erde deckt,
Denn mancher schon zog kühn zu ihr hinab,
Doch nicht ein einziger kam noch zurück！（148-56）

･･･彼女は
炎の城に住んでいる。そこに通ずる道を
悪賢い侏儒の一族が見張っている。
急にしごみつき、押しつぶして首を絞める一族で、
彼らを統率しているのが獰猛なアルベリヒだ。
そしてさらに彼女は英雄をも
打ち負かすという力を具えている。

･･･彼女に求婚する者は、同時に
自らの死を求めようなもの。彼女を連れ帰ることができねば、
求婚者は二度と故郷へ帰ることができないのだから。
それに彼女のところに辿り着くのも困難なことであるが、
彼女に対抗することはもっと困難なことだ。
求婚者が彼女の身体の一部に触れてもしたら、
その者は冷たい大地に覆われることになる。
これまでもすでに多くの者が彼女のもとに出かけて行ったが、
誰一人として戻って来た者はいないのだ！

『ニーベルンゲンの歌』におけるブリュエンヒルトもまた「勇猛なる武人を相手
として、愛を賭けて、三種競技を行い、求婚者はその一種目たりと敗れれば、
首を失うことになる」（326-7）という女豪傑として登場しているが、ヘッヘル
の戯曲ではさらに北欧伝承の要素が一段と強められて、「ブリュエンヒルトの城は
炎に囲まれ」（142）、「その城に通ずる道をアルベリヒの侏儒一族が見張ってい
る」（142-5）ということになっている。そして「彼女に対抗するのはもっと困
難である」（152）という女豪傑であればこそ、ゲンター王もただちに彼女に求
婚することを決意する（157-9）のであ、ヘッヘルにおけるゲンター王の決
意は『ニーベルンゲンの歌』においてよりもさらに強くになっていると言っても
よいであろう。

このようにゲンター王がちょうどブリュエンヒルトへの求婚を決意したところ
へ、ニーデルラントの英雄ジークフリートが到着する。そのときハーゲンはジー
クフリートの英雄譚——皮膚は角質化し、脣には名剣バルムンクを帯び、ニー
ベルンゲン財宝の所有者であり、霧の首巾をも携えているという話（173-8）
——を簡単に語るが、これは明らかに『ニーベルンゲンの歌』（86-101）にな
らったものである。また到着のジークフリートが十二人の従者を従えている
（163）点も『ニーベルンゲンの歌』（59）と同じであれば、ジークフリートが
クリームヒルトの愛を求めてこの国にやって来た——そのことはあとで分かっ
てくる——にもかかわらず、最初のうちは力ずくでそのブルゲントの国を奪い
取ろうと、攻撃的な態度を取っている（182-220）点も素材の叙事詩（106-14）
と同じである。ただ『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートの挑戦的な態度に
オルトウィーンが抵抗している（116-7）のに対して、ヘッベルの作品ではハーゲ
ンの実弟ダノンヴェルトが反抗的な態度をとっている。ダノンヴェルトが
ジークフリートの挑戦を竜の血による不死身の肌ゆえの態度だ（221-2）と言っ
て悪口を言えば、ジークフリートは「竜の血を浴びたときに一枚の菩提樹の葉
が肩に落ちてきた」（226-7）ことを打ち明けて、相手の臆病風に吹かれた態度
を逆に揶揄する。それでもやはり相手方が自分の堅い皮膚を恐れていることを
悟って、ジークフリートは自ら考えを変えて、城庭で石投げを競うことを提案
する（238-43）。この石投げ競技は『ニーベルンゲンの歌』における130詩節と
133詩節の断句に由来するものと考えられるが、『ニーベルンゲンの歌』ではジー
フリトが歓迎された後の競技であるのに対して、ヘッベルの戯曲では歓迎前の競技になっている。このような多少の相違はあれ、ヘッベルの作品においてもゲンター王のことは素材の叙事詩においてと同様に最初からジークフリートを歓迎する姿勢である。石投げを競ったあとは一緒に飲むことをゲンター王が提案すれば、ジークフリートも喜んでそれに賛成する。さっそく石投げの準備に取りかかるが、その競技の様子は実際に舞台の上では演じられずに、続く第3場でクリームヒルトとその母の対話によって表現されることになる。

II. クリームヒルトの「鷹の夢」——第3場——
その第3場はいきなり「その鷹というのはお前の夫なのじゃ」(266) という母后ユーテの台詞で始まっている。あとの台詞（324）からも分かるように、姫クリームヒルトは前夜不吉な「鷹の夢」を見て、それを母後に語ったのである。母後のその言葉に対してクリームヒルトは次のように答える。

・・・Nicht weiter, Mutter.
Wenn du den Traum nicht anders deuten kannst.
Ich hörte stets, daß Liebe kurze Lust
Und langes Leid zu bringen pflegt, ich seh’s
Ja auch an dir und werde nimmer lieben,
O nimmer, nimmer！

(266-71)

・・・母上様、それ以上はおっしゃらないで。
その夢に別の解き方をしようとなさらないのなら。
いつも聞いていますが、恋の歎びは短く、
苦しみは長いもの。あなたを見てもそれは
よく分かります。だから私は決して恋などしませんわ。
ああ、決して、決してしませんわ！

このような娘の言葉に対して、母後は次のように言って娘を教え諭す。

・・・Kind, was sagst du da?
Wohl bringt die Liebe uns zuletzt auch Leid,
Denn eines muß ja vor dem andern sterben,
Und wie das schmerzt, das magst du sehn an mir.
Doch all die bittren Tränen, die ich weine,  
Sind durch den ersten Kuß vorausbezahlt,  
Den ich von deinem Vater einst empfing.  
Auch hat er, eh er schied, für Trost gesorgt,  
Denn wenn ich stolz auf tapfre Söhne bin,  
Und wenn ich dich jetzt an den Busen drücke,  
So kann’s doch nur geschehn, weil ich geliebt.  
Drum laß dich nicht durch einen Reim erschrecken:  
Ich hatte lange Lust und kurzes Leid.  

(271-83)

・・・娘よ、お前はなんてことを言うの？
確かに恋は最後には苦しみをもたらす。
どちらか一方が先に死なねばならないのだから。
それがどんな悲しみかは、私でよくお分かりのはず。
でも私が流すこれらすべての涙は、
私がかつてお前の父さんから受けた
最初の接吻によって先払いがしてあったのじゃ。
お父様も、亡くなる前に、慰めを残しておいてくれた。
私が勇敢な息子たちを誇りに思うことができて、
今こうしてお前を胸に抱くことができるのも、
私が恋をしたからこそ起こりうることだよ。
だからお前はそのような言葉を恐れてはいけません。
私の願は長く、苦しみは短かったのじゃ。

この母と娘クリームヒルトの対話が『ニーベルンゲンの歌』第一歌章における「鷹の夢」（13-9）に直接基づくものであることは明らかである。対話の核心にある「恋は結局悲しみをもたらす」（272）という言葉にしても、『ニーベルンゲンの歌』における言葉（17）と逐語的に同じと言ってもよいほどである。ただヘッベルにおける母と娘の言葉は、『ニーベルンゲンの歌』よりもより人生論的な内容を示している。「失うくらいなら、持たない方がずっとよいではありませんか！」（284）と言うクリームヒルトに対して、母と娘は「しかしこの世で失わずに済むものがありえようか！」（285）と答えて、娘にこの世の無常を説いて聞かせる。無常であればこそ、自分に気に入ったものがあれば、皆と同じように、それをつかみとるよう、教え論ず（291）である。ク
リームヒルトはこの母后の説得に言葉を返そうと思いながら、ふと窓の外を見
で、言葉を切ってしまう。城際に立つ一人の見知らぬ勇士の姿に、彼女は顔を
赤らめ、心を乱してしまったのである。その娘の狼狽ぶりを見て母後は「あの
鷲なら驚を恐れる必要はない」（321-2）などと言って、娘心を駆り立てる。そ
の勇士がニーベルンゲンのジークフリートであることは言うまでもない。ジー
クフリートは今や城際でブルゲントの勇士たちと石投げ競技を始めようとして
いるところである。その競技の様子が今やこの場で母後と娘の会話によって表
現されるのである。

まず最初にジークフリートと石投げを競ったのが若きギーゼルヘア、二番手
がゲーレノートであったが、いずれも客人に負けてしまう。順番通りにゆけば、
次は主馬頭ダックヴァルトの番であったが、ゲンター王が恐ろしい見幕でダ
ックヴァルトを押し退けて、自らが岩を投げる。さすがにゲンター王はゲーレノー
トの二倍も遠くへ投げはたものの、それでもやはりジークフリートの方がそ
れを上回った。いよいよ最後に躍り出たのがハーゲンである。ハーゲンはそれ
以上投げようにも場所がないほど遠くへ石を投げた。しかしそのあとジークフ
リートの投げた岩は城の塔を越えて、ついにはライン河の中へ飛び込んでし
まった。ダックヴァルトと同様、フォルケルも出番なくあきらめて、一同が
握手をしているところを見れば、石投げは終わってしまったようである。この
競技のさまを眺めていた母後と娘の方も祈祷の時刻になったので退場する。

III. ジークフリートとゲンター王の契約——第4場——
こうしてジークフリートは石投げ競技のあとゲンター王から改めて歓迎の挨
拶を受け、客人としてヴォルムスに滞在することになる。素材の叙事詩とはほ
同じ展開であるが、しかし「ニーベルンゲンの歌」ではジークフリートはヴォルム
スに長く滞在しているうちに、姫クリエムヒルトへの求婚の意志を打ち明け
られずに恋の苦しみを味わい続けるのに対して、ヘッベルにおけるジークフ
リートは石投げ競技のあと単刀直入にクリームヒルトへの求婚の意志をその兄
ゲンター王に伝えている。それに対してゲンター王は仲人が必要とあれば自ら
がその任に当たることを申し出るが、ただそれには条件があって、次のように
答える。

・・・Wenn's dir aber
Am Werber fehlt: ich leiste dir den Dienst,
Nur mußt du mir den gleichen auch erweisen.
ゲンター王が北方の乙女プルンヒルトに求婚するつもりであることを知ったジークフリートは、『ニーベルンゲンの歌』と同じように、ただちにそれを思いとどまるよう忠告する。ジークフリートの言葉によれば、彼女は「血管の中で溶けた鉄が煮えたぎっている」（477）ような女性で、「戦いで彼女に打ち勝つことのできる者は、一人の男を除いては誰もいない」（479-80）という。「その一人の男、つまり、この私の手から彼女を受け取るのかいやなら、思いあきらめるしかない」（506-8）と忠告するとともに、自らが一緒について行ってやることを申し出るのである。「どのように事を運ぼうとしているのか」（515）とのハーゲンの質問に、ジークフリートは石投げ、幅跳びそして槍投げという三つの困難な試練に打ち勝つ作戦を打ち明けて言うところによると、要するに、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、ゲンター王は身構えをするだけで、実際にはジークフリートが石を投げて、しかもゲンター王をかかえたままそのあとを追って跳ぶというものである。それを実現させるのが、すなわち、「隠れ頭巾」（Nebelkappe, 525）であり、ここで重要なことは、ヘルペルの戯曲におけるジークフリートは以前にも実際に使って彼女の国に出かけたことがあることをはっきりと口にしていることである。『ニーベルンゲンの歌』にもその痕跡はわずかながら窺い知ることはできる（vgl. 331）が、しかし、ヘルペルの作品ではジークフリートは「結婚の申し込みのためではなく、自分の姿は見られずに、少しばかり様子を眺めた」（527-8）ということになっている。昔が驚いた様子で不思議に思っているので、ジークフリートはゲンター王に催促されたこともあって、その折りのことを皆に長々と話して聞かせるのである。『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネが語るジークフリートの冒険譚（86-101）を、この作品ではジークフリート自らが語るのであり、そこにヘルペルの特徴があると言えよう。長々と語るジークフリートの冒険譚は、次のように三つにまとめられよう。
まず第一の冒険はニーベルング族の財宝獲得に関するものである。戦いの功名心に駆られて冒険の旅に出かけた最初の日、ジークフリートはある洞穴の入口で二人の若い勇士が激しく争っているところに出くわした。二人はニーベルング王の息子たちであったが、父王――あとで聞くところによると、二人は父王を叩き殺したのだという――を埋葬したあとで、その遺産をめぐって争っていたのである。二人のまわりには宝石の山が築かれ、その中には古い王冠や奇妙な形の角杯、そして何よりもまず名剣バルムングも見えた。そのうえ洞穴の中からは黄金が赤々と光り輝いていた。二人の勇者はジークフリートを見るとき、第三者としてその財宝を分配してくれるよう手要だったので、ジークフリートはその役目を引き受け果たしたところ、二人は互いに自分の方分前が少ないと言ってあられ出した。そこでジークフリートは要求されるままに再度両方の財宝をかき混ぜて二分したが、二人はますます怒り出し、すばやく剣を抜いてジークフリートに向かって斬りつけてきた。ジークフリートは自らの剣を抜く暇もなかったので、そばにあったバルムングの剣をつかんで自らの身を守ろうとしたところ、二人は盲目状態で鉄に向かって突き進む猪のように、互いに刺しばがえてしまった。こうしてジークフリートはそこにあったすべての財宝の持ち主となったのである。

続く第二の冒険は竜退治に関するものである。ジークフリートはそれからその洞穴の中へ入って行こうとしたところ、驚いたことには入口を見失ってしまった。大地の中から突然土塵が盛り上がってきたかのように見えたのである。ジークフリートは道を切り開こうとしてそれに剣を突き刺すと、水ではなく血が流れ出てきて、ビクリと身動きする。ジークフリートは土畑の中に蛇でもいるのかと思ったら、何と土畑全体が一匹の竜なのであった。竜が身体を起こさないうちに、ジークフリートはすばやく竜に飛び乗り、青い頭を後ろからバルムグの剣でつって叩きつぶしてしまった。ジークフリートはそのあと、まるで岩だらけの山でも切り開くように、その巨大な竜の肉や骨を叩き割って、ようやくそのことで洞穴の入口まで辿り着き、洞穴の中へ足を踏み入れるや否や、丈夫な腕にしごみつかったように感じた。その腕はジークフリートの目に見えないので、ほとんどジークフリートの肋骨を押しつぶしてしまうような力であり、まるで空気に抱き締められたような感じであった。それがあの乱暴な侏儒アルベリヒであった。ジークフリートはこの怪物と激しく格闘していううちに、ついに侏儒は姿を現した。格闘の最中になんのはずみでか侏儒の霧の頭巾を脱がせてしまったようで、侏儒は力を失って、その場に倒れてしまっただけである。ジークフリートは侏儒を虫けらのように踏みつぶしてしまうと
したが、秘密を教えてくれるというので、命だけは助けておいた。その秘密とは、まだ湯気が立っている限り竜の血には魔力が秘められているということであった。ジークフリートはこうして竜の血を浴びて、不死身の肌となったのである。

以上、第一の冒険と第二の冒険は『ニーベルンゲンの歌』においてもハゲネの語り（86-101）という形で伝承されており、ヘッヘルがその英雄叙事詩を素材に用いたことは容易に推測されるが、最後の第三の冒険は『ニーベルンゲンの歌』には見出されない。ジークフリートは、すなわち、竜の血の一滴がはねて彼の唇にかかると、たちまち頭上でさえずる鳥の言葉を理解できるようになったのである。竜の血が舌に触れた瞬間、鳥の言葉が分かるようになるのは、ドイツの伝承ではなく、北欧の伝承9)によるものであり、ヘッヘルはここで北欧の伝承をも取り入れながら独自の世界を構築しているのである。ジークフリートの周辺をおっていた菩薩樹の老木の中からさえずっていたのは、小鳥やカラス、コガラスそしてフクロウであったが、それらがしきりと言い争っている言葉の中にはブルンヒルトの名前とともにジークフリートの名前も聞かれた。話し声が雑然として入り乱れていたので詳細は分からないが、どうやら一つの冒険がジークフリートを待ち受けているようである。カラスがまず先に飛び立ち、それにフクロウが続いたので、ジークフリートはその二羽の鳥のあとを追いかけに行くと、やがて炎の海が現れ、その向こう岸には一つの城が見えた。城は白熱した金属のように青白い光を出して煌々と輝いていた。ジークフリートは立ち止まった。するとフクロウが「パルムングを轍から引き抜いて、頭上で三度振り回すのだ！」（635-6）と言うので、言われた通りにすると、たちまち海は消え失せた。今や城の中からは人声がして、城壁の上には人影も見え始め、一人の気高い乙女が見下ろしていた。「あれが花嫁だ！さあ、隠れ頭巾を脱ぐのだ！」（641-2）とフクロウが叫んだので、気づいて見れば、ジークフリートはその後まで知らずに隠れ頭巾を被ったままだったのである。二羽の鳥が隠れ頭巾をつかみ取ろうとしたので、ジークフリートはそれを両手で押さえた。なぜそうしたかというと、ジークフリートがはっきりと言っているように、「城壁の上に立つブルンヒルトは、大変美しかったものの、自分の心を

9) 「歌謡エッダ」中の「ファーヴニルの歌」（谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年138-43頁）及び「ヴォルスンガ・サガ」（菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会1979年56-8頁）を参照のこと。
ヘッブルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

動かすまでには至らなかった」(647-8) からである。ジークフリートは、すなわち、「そこで求婚する気になれないと感じた者は、挨拶をすべきではない」(649-50) と思ったからである。

このようにヘッブルの戯曲ではジークフリートは確かにブルンヒルトの国を訪れたものの、彼女と婚約していなければ、彼女と一言も言葉を交わしていないということになっている。この点にヘッブルの独創性があると言えよう。いずれにしても姿を見られずに立ち去ったジークフリートは、「城の様子や彼女の秘密、そしてそこまでの道を知っている」(651-2) ので、ゲンター王を喜んで案内しようと申し出るのである。フォルケールはそのような策略を用いることが気に入らず、ゲーレノートとともに反対するが、ゲンター王は「それは少しも恥ずかしいことではない。泳いで渡れない所には船で渡る。こぶして間合いを合わないときには剣を用いるのと同じことだ」(658-62) と言って、ブルンヒルトの国へ出かけることを決意する。こうしてゲンター王は、ブルンヒルトをこの国に連れて来た間にはクリームヒルトをジークフリートの妻にすることを約束し、両者の契約が成立するのである。

第二部『ジークフリートの死』

I. イーゼンラントのブルンヒルト——第一幕——

以上のように第一部の展開を見てくると、ジークフリートは神話的世界からやって来た英雄であることが理解できるが、ジークフリートと同じように神話的世界上に属しているのがブルンヒルトである。第二部において登場する彼女の乳母にフリッガという名前がつけられていることからもそれは明らかである。その乳母にはヘッブルの作品ではブルンヒルトの生い立ちの秘密を語るという役割が与えられており、この乳母によってブルンヒルトの生い立ちが明らかにされるのである。

第一幕第一場でその乳母フリッガが語って聞かせるところによると、イーゼンラントの女王が姫を産むと同時に息を引き取ったある日のこと、フリッガたちが女王の亡骸のそばでその夜を明かしていたところへ、思いがけなく火の山から一人の老人が現れて、ルーネの文字を刻み込んだ板を添えてフリッガに一人の乳飲み子を預けたのであった。その老人の髪は雪のように白く、しかも女にもめずらしいくらいの長さで、大きな外套のように身体を包み込み、それでもまだ後ろへ引きずられていた。フリッガがあとで気がついて振り返って見ると、その老人はすでに影も形も見えなかったという。
さて、その老人がフリッガに預けた乳飲み子は、亡き女王の冠へ手をのばしたので、それを彼女に見ると、不思議にもびったりとった。さらに不思議なことには、その乳飲み子は亡き女王の腕に抱かれていた姫と瓜二つで、ただ息をしているというだけでの違いであった。すなわち、姫はたちまち息を引き取ってしまったのである。ちなみに、国王も長い間子供が授かるのを楽しみにしていたが、その姫が産まれる一ヶ月前に突然他界してしまったという。

こうしてイーゼンラントの国では姫と交換するように一人の乳飲み子が授けられたので、翌日僧侶がその子に洗礼を施そうとしたところ、聖水がその子の額にかかる前に、僧侶はたちまち手が動かなくなったという。すぐに二人目の僧侶を呼び寄せたところ、今度は聖水の礼は難なく済んだが、いざ祝福を施そうすると、僧侶はたちまち嘆かられて、それ以後言葉が話せなくなったという。三人目の僧侶を見つけ出すのに長い時間がかかったが、遠くからやって来たその僧侶も、洗礼が済むや否や、ひっくり返って、二度と起き上がることができなくなった。その乳飲み子の方は成長し、丈夫になった。しかもその娘のすることが、ルーネ文字の板に予言されていたように、吉凶のしるしとなった。その娘が、すなわち、ブルンヒルトであり、故郷は神々の住むヘクルの山で、母がいるとしたらノルンやヴァルキューリエンの中にいるであろう。このようなことを乳母フリッガはブルンヒルトに長々と話して聞かせたのである。

以上のようなるブルンヒルト像は従来のドイツにおけるニーベルンゲン伝説においてはもちろんのこと、北欧のニーベルンゲン伝説においても伝承されていない。ここにおけるブルンヒルト像は特に北欧神話化されて、ヘッペルの独創性がよく観える箇所である。しかし、そのあとの展開はまた素材の『ニーベルンゲンの歌』に忠実に従っている。すなわち、そのイーゼンラントのブルンヒルトのもとヘゲンター王が求婚のためにやって来たのである。ただ『ニーベルンゲンの歌』では随行してきた者がジークフリートとハゲネのほかにダンクワルトであったが、ヘッペルではジークフリートとハーゲンのほかにフォルケルである。ブルンヒルトがまず最初にジークフリートに挨拶をすると、ジークフリートは次のように答える。

Auch tust du mir zu viel der Ehre an,
Mich vor dem König Gunther zu begrüßen,
Ich bin hier nur sein Führer. (799-801)
ヘッペルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

ゲンター王をさしきいてまず私にご挨拶とは、
まことに恐縮の至りです。
私はここへはただ王の案内をして来ただけです。

求婚者がゲンター王であることを知ったブルンヒルトは、ゲンター王に心構えを聞いてから、求婚のための決闘について「敗れた者は、ただちに命はなく、その従者たちも同様の結果となる」(808-9) ことを伝えて、覚悟を促す。ハーゲン（821）に続いて、ジークフリートもゲンター王の比類なき名誉をほめ称えて（822-5）、ブルンヒルトに決闘を要求すると、彼女はしばらぐの間、時間の歩みというものがない自らの世界について語り始める。表面上は『ニーベルンゲンの歌』と同じ経過を辿りながら、作品の奥底ではヘッペルの独創的世界が展開されていることが理解されよう。ブルンヒルトは自らの神話的世を語りながら、一時は放心状態に陥っていたが、乳母フリッガに促されると、ただちに決闘の準備を始める。ジークフリートは船の後片付けをしてくると言って、その場を退く。ブルンヒルトも退きながら勇士たちに決闘を呼びかけたところで幕が下りる。その決闘のさまは第一部の石投げと同様に舞台の上では演じられないことになっている。戯曲化に伴う結果と言ってもよいであろう。

II．二組の結婚——第二幕——

第二幕はヴォルムの宮廷で料理番ルーモルトがイーゼンラントからの客人を出迎える準備にいそしんでいる場面でもって始まっている。その第1場でルーモルトがギーゼルヘアと交わす会話から、ジークフリートがゲンター王の案内をしてイーゼンラントへ向かう途中、リューデガストとリューデガールの攻撃を阻止しようと彼らを捕虜にしたことが分かれる。『ニーベルンゲンの歌』第4歌章における同様のエピソードをヘッペルは巧みにこの場面の会話の中に取り入れている。ジークフリートはこのような英雄だから、今回のブルンヒルトへの求婚の旅もうまくいくだろうとギーゼルヘアがルーモルトと一緒に話しているところへ、ゲーレノートが現れて、ライン河の下流から船がこちらに近づいていることを報告する。花嫁ブルンヒルトを乗せた船であることは言うまでもない。

その船に先立って、ジークフリートが先触れの使者としてヴォルムスの宮廷に到着する。『ニーベルンゲンの歌』第9歌章に由来する展開である。ただヘッペルの戯曲ではこの場面で初めてジークフリートは母後ヴーテとクリームヒルトに対面することになっている。戦いでは勇敢なジークフリートも、この母娘
対面するにあたっては言葉に窮してしまう。クリームヒルトの方も「このような気高い使者」(1048) にどのように贈り物をしたらよいか分からずに、あわてているうちにハンカチを落としてしまう。ジークフリートはそれを拾って、自分への贈り物に所望する。クリームヒルトは当然のこともながら恥じるが、それに対してジークフリートは次のような言葉で答える。

Kleinodien sind mir, was den andern Staub,
Aus Gold und Silber kann ich Häuser bauen,
Doch fehlt mir solch ein Tuch. (1051-3)

ほかの人には塵に思えても、私には宝物です。
金や銀は建物ができるほど持ってはいますが、
私にはこのようなハンカチがないのです。

このあとのクリームヒルトの言葉によれば、そのハンカチは彼女自身が織ったもの（1054）である。「それを心から与えて下さいますか」とジークフリートが尋ねると、クリームヒルトも「喜んで差し上げます」(1055) と応じる。「ニーベルンゲンの歌」においては見出されない、ヘッペル自身の独創による小さな場面であるが、両者の息がぴったりと合っているさまが簡潔に表現されており、この場面は「ニーベルンゲンの歌」第5歌章においてジークフリートが初めてクリエムヒルトに出会う場面（279-304）に匹敵するほどの効果を上げており、ヘッペル自身の独創的、巧みな手腕を表す場面であると言ってもよいであろう。

やがてラッパの音とともにグンター王一行がヴォルムスの宮廷に到着する。「ニーベルンゲンの歌」ではこの花嫁歓迎の場面では穏やかな挨拶のきま（579-95）が展開されているに対して、ヘッペルの戯曲では最初から穏やかならぬ雰囲気である。ハーゲンがジークフリートに語るところによると、グンター王は花嫁ブレンヒルトにいまだに接吻一つさえできない（1075-7）状態であるという。ブレンヒルトは初めのうちは乙女にふさわしいような抵抗をしていたが、グンター王を親指一本ではじき飛ばすことができると分かるや否や、急にあばれ出して、グンター王の襟首をつかんで、ライン河の中へ突き落とす有様である（1079-87）。このような花嫁に随行してきた乳母が花嫁にいろいろと余計な悪知恵を与えているようで、ハーゲンには花嫁以上にこの乳母が恐ろしいという。ブレンヒルトは母后ウーテとクリームヒルトからやさしい歓迎の挨拶
ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

を受けて初めてゲンター王と夫婦の契りを結ぶ気になる。クリームヒルトにすみれの花を摘み取ってもらって、ブルンヒルトは初めて花の香りというものを体験する。この新しい妹上に向かってクリームヒルトも「どうぞこの花を、この国にはまだあなたを幸福にするものが目の前にたくさんあるというしげにしてください」(1143-5) というやさしい言葉をかける。両者の関係はこれからうまくいくかに見たが、しかしジークフリートがゲンター王に約束を思い出させて、クリームヒルトとの婚約が成立するや否や、ブルンヒルトはジークフリートとクリームヒルトの間に割って入り、姉として一言、次のように不平を述べるのである。

・・・Wie darfst du’s wagen.
Die Hand nach ihr, nach einer Königstochter,
Nur auszustrecken, da du doch Vasall
Und Dienstmann bist！

(1219-22)

・・・そなたは臣下であり、
従者の身分であるの、
国王の娘に求婚しようと、
どうしてそんなことができるのですか！

これに対してゲンター王が「彼は天下に並びない豪傑であり」(1223-4)、「そのうえ莫大な財宝の持ち主である」(1227) と説明しても、ブルンヒルトは「それが妹を与える理由になりますか」(1228) と怒る。そこでゲンター王が「彼は私と同様に国王である」(1321) と言えば、「でもその彼は召使になったのでしよう？」(1231-2) と皮肉を言う。ゲンター王は彼女が自分の王妃になったのにこの謎を打ち明けようと約束するが、ブルンヒルトは「秘密を知らない限りは妃になりません」(1234) とまで言い切る。母後が彼女を宥めると、ブルンヒルトは、「お誓いした通り、教会までは彼に従いましょう。そして喜んてあなたの娘になりました。しかし彼の妻にはなりません」(1237-9) と答えて、ひとまず礼拝堂へと入って行くのである。

一方、ジークフリートの方は自らが一国の王であることのあかしとして、クリームヒルトにニーベルンゲンの財宝を贈るために、そのあとすぐにその財宝を侏儒たちに運ばせる。このクリームヒルトへの後朝の贈り物については『ニーベルンゲンの歌』ではずっとのちにジークフリートが暗殺されたあと（1116）で記
述べられているが、その描写をヘッベルはこの場面に挿入していると考えてもよいであろう。
さて、夜になると宴会が催される。ブルンヒルトは、やがてハーゲンがジーグフリートに語る言葉によれば、その宴席においてもただ食卓についたまま泣いているのみである。ハーゲンはジーグフリートに目配せを送って、彼を部屋の外に連れ出して、再びジーグフリートの手助けを依頼する。ブルンヒルトをもう一度打ち懲らしめてほしいと願うのである。その策略を次のように説明する。

・・・Der König geht mit ihr
Ins Schlafgemach. Du folgst ihm in der Kappe.
Er fordert, eh sie sich das Tuch noch lüftet,
Mit Ungestüm den Kuß. Sie weigert ihn.
Er ringt mit ihr. Sie lacht und triumphiert.
Er löscht, als wär's von ungefähr, das Licht
Und ruft: So weit der Spaß und nun der Ernst,
Hier wird es anders gehn, als auf dem Schif!
Dann packst du sie und zeigst ihr so den Meister,
Bis sie um Gnade, ja ums Leben fleht.
Ist das geschehn, so läßt der König sie
Zu seiner untertän'gen Magd sich schwören,
Und du entfernst dich, wie du kamst！（1307-19）

・・・国王が彼女と一緒に
寝室に入る。お前は頭巾を被って彼のあとに従う。
彼女が布団をまくり上げようとするとときに、国王は
強引に接吻を追る。彼女は拒絶するであろう。
国王は彼女と格闘するが、彼女が勝って笑うことだろう。
国王は、偶然消えたように、明かりを消して、
叫ぶ。「遊びはこれまで。これからが本気じゃ。
ここでは船の中とは違うぞ！」と。
それからお前が彼女を組み伏せて、彼女を懲らしめるのだ。
彼女が恥みと命を願い出るまで。
それが濟んだら、国王が彼女に
従順な女になることを誓わせる。
そしたらお前は、もと来たように、立ち去るのだ！

いつの間にかゲンター王もその場にいて、ハーゲンとともにジークフリートに援助を頼む。ジークフリートは気が進まずに拒み続けるが、ハーゲンの執拗な説得に誘き伏せられて、ついに承諾してしまう。第二幕はこの承諾した場面で終わっている。

III．両王妃の口論——第三幕——

続く第三幕は、第二幕の最終場面でハーゲンが説明した通りのことが実行されて、ジークフリートがゲンター王に代わってプリンヒルトをベッドの上で取り押さええたことが前提となっている。その格闘の際にジークフリートがプリンヒルトから帯を奪い取って来たことは、翌朝礼拝堂へ向かう途中のクリームヒルトとジークフリートとの対話から次第に明らかとなってくる。ただ『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートがプリンヒルトの帯を妻のクリムヒルトに与えたのであった（680）が、ヘッペルの戯曲ではジークフリートが無意識的に自分の帯を懐に入れて持ち帰ったことになっている。その帯をクリームヒルトは翌朝、部屋の中で見つけ（1451）、ニーベルンゲンの財宝の一つだと思い（1453-4）、夫を喜ばせるために急いでその帯を締めて出た。ところが、妻クリームヒルトがそれをきっかけに気づかせようと努めても、ジークフリートは一向にそれに気づかなかったばかりか、それを目にしてのちもなおそれには見覚えがない（1456）と言うばかりである。「くちゃくちゃになって床の上に落ちていた」（1462）ことを聞き知って、ようやくジークフリートは昨夜の格闘の場面を思い出して、それがプリンヒルトの帯であったことを悟るのである。「どのようにしてこの帯を手に入れたのですか」（1475）と尋ねるクリームヒルトに対して、ジークフリートは「これは恐ろしいほど厄介な秘密なので、聞かないでおくれ」（1475-7）と言うものの、夫の唯一の急所に関する秘密さえ知っているクリームヒルトは、しきりに子細を聞き知ろうとする。そのようなところへプリンヒルトがゲンター王とともに姿を現したので、ジークフリートはあわてふためく。その夫の狼狽ぶりを見て、クリームヒルトはプリンヒルトとその帯との関係を察して、それを彼女に見せようとするとので、ついにジークフリートは「帯を隠してくればならば事情を打ち明ける」（1493）と約束して、妻とともに行列に従ってその場を立ち去って行くのである。

二人に代わってゲンター王とともにその場に姿を現したプリンヒルトは、前
日に比べるとだいぶ機嫌も直り、夫に対して従順になっている。夫に向かってブルンヒルト自らが「自分は驚くほど人間が変わってしまった」（1504）と言っているほどである。イーゼンラントからヴォルムスへ向かう船の中でゲンター王に激しく抵抗したことに関しても、次のように素直に詫びるのである。

・・・Vergib mir ! Großmut war's,
Was ich für Ohnmacht hielt. Du wolltest mich
Nur nicht beschämen, als ich auf dem Schiff
So unhalt trotzte！・・・
（1518-21）

・・・許してください！私は無力だと思っていたのに、
それは寛大な心だったのですね。私が船の上で
あんなに激しく抵抗したとき、あなたは私に
恥をかかせたくなかったのですね！・・・

ブルンヒルトはこのように「穏やか」（milde, 1525）になったのであるが、しかし、ジークフリートに対してもは依然として憎しみを抱いている。彼女がゲンター王に語る言葉によれば、「国王たる者が道案内したり、使者の役目を引き受けたりすることが不思議でならない」（1528-31）のであり、そのような男に彼女がイーゼンラントでまず最初に挨拶したことがなんとも口惜しいのである。否、それどころか、ブルンヒルトはしまいには彼を殺すようにと要求する。
『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートの暗殺を要求するのはハゲネであろうが、ブルンヒルトはその暗殺の口実を作るだけであるのに対して、ヘッペルの戯曲では両王妃口論の前にすぐにブルンヒルト自らがジークフリートの殺害を要求しているのである。それに対してゲンター王が「彼は私の妹婿であり、彼の血は私の血でもある」（1548-9）と言えば、ブルンヒルトは「では、彼と一騎打ちの勝負をして、彼を残しくて飛ばしてください」（1550-1）と要求する。「この国にはそんな習慣はない」（1554）と答えるゲンター王に向かって、ブルンヒルトは次のように主張するのである。

・・・Ich laß nicht ab,
Ich muß es einmal sehn. Du hast den Kern,
Das Wesen, er den Schein und die Gestalt !
Zerblase diesen Zauber, der die Blicke
Der Toren an ihn fesselt.  

...  

... Ob er den Lindwurm schlug  

Und Alberich bezwang: das alles reicht  

Noch nicht von fern an dich. In dir und mir  

Hat Mann und Weib für alle Ewigkeit  

Den letzten Kampf ums Vorrecht ausgekämpft.  

Du bist der Sieger, und ich fordre nichts,  

Als daß du dich nun selbst mit all den Ehren,  

Wornach ich geizte, schmücken sollst. Du bist  

Der Stärkste auf der Welt, drum peitsche ihn  

Zu meiner Lust aus seiner goldnen Wolke  

Heraus, damit er nackt und bloß erscheint,  

Dann leb er hundert Jahre oder mehr.  

(1554-8)

...私はやめません。  

一度それを見なくては。あなたは芯の強い方で、  

中身のある方なのに、彼は見かけだけで、形だけです！  

愚かな人たちの視線を彼に縛り付けている  

魔力を暴いてください。...

...  

... 彼が竜を打ち殺し、  

アルベリヒを征服したにせよ、それらすべてでも  

まだあなたには遠く及びません。あなたと私は  

男として女として未来永劫のために  

優先権をめぐって最後の戦いを戦い抜いたのです。  

あなたは勝利者ですので、私があこがれてきた  

すべての名誉でもってあなたが自らを飾ること  

以外には、私は何も要求しません。あなたは  

この世で最強の者です。だから彼が丸裸になるよう、  

その黄金の雲の中から彼を叩き出して私を喜ばせてください。  

そのあとは彼は百年でもそれ以上でも生きればよいのです。

こう言ってブルンヒルトはゲンター王とともにその場を立ち去るのであるが、
Mein edler Gatte ist nur viel zu mild,
Um den Verwaltern seiner Königreiche
So weh zu tun, sonst hätt' er seinen Degen
Schon längst zu einem Zepter umgeschmiedet
Und über die ganze Erde ausgestreckt.
Denn alle Lande sind ihm untan,
Und sollte eins es leugnen, bät ich mir's
Sogleich von ihm zum Blumengarten aus. （1609-16）

私の夫はとても温順な人ですから、
自分の王国の支配者たちを悲しめることは
できないのです。そうでなければ夫はすでに
剣でもって王位を掌握して、
世界中を支配しているところです。
というのも、すべての国は夫に服従しているのですから。
誰かがそれを否定でもしたら、私はただちに
その者の国を私の花園にしてもらいます。

と言えば、ブルンヒルトはブルンヒルトで自らのフンターの優位を主張しなが ら、イーゼンラントでの出来事を引き合いにして、次のように反論する。

Er trat bei mir zurück vor deinem Bruder,
Wie ein Vasall vor seinem Herrn, und wehrte
Dem Gruß, den ich ihm bot. Das fand ich auch
Natürlich, als ich ihn — er nannte sich
Ja selber so — für einen Dienstmann hielt. （1666-70）

Ich sah den Wolf wohl so vor einem Bären
Beiseite schleichen, oder auch den Bären
Vor einem Auerstier. Er ist Vasall,
Wenn er auch nicht geschworen hat. (1672-5)

私のところに来たとき、彼は家臣が主君にそうするように、
あなたの兄上の前から後ろへ退いて、私が
送った挨拶を退けたのです。私は彼を——彼が自ら
そう呼んだように——家来だと見なしましたので、
それも当然のことだと思いました。

狼は熊の前では脇へ退く、
あるいは熊は野牛の前では脇へ退くものと
私は心得ました。彼はたとえ誓わなかったとしても、
家臣には違いないのでです。

このような言葉に気分を害されたクリームヒルトとブルンヒルトの間はますます
険悪になっていき、ついにクリームヒルトは、『ニーベルンゲンの歌』にお
いてと同じように、ブルンヒルトを「わが夫の側女」(das Kebseib meines
Gatten, 1690) と罵ってしまい、さらにその証拠として帯を見せてしまう。「そ
れば私のもので、他人の手に渡ったところを見ると、夜の間に盗まれたに違い
ない」(1692-4) とブルンヒルトが反抗すれば、クリームヒルトは「そなたに
勝った男、つまり、私の兄上ではなく」(1696-7)、「私の夫が私にくれたもの
です」(1699) 言って、秘密を暴露してから、ブルンヒルトに先じて待女
たちを引き連れて礼拝堂へ入って行くのである。

ブルンヒルトはこうして自らが欺かれていたことを知り、このうえない恥辱
を受けて、乳母の胸に泣きすぎる。このブルンヒルトの恥辱を利用してジーク
フリート暗殺を主張したのが、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、ハー
ゲンである。王弟ギーゼルヘアはそれを諌めるが、それに対してハーゲンはこ
う言う。

Wollt ihr Bastarde ziehn an eurem Hof?
Ich zweifle, ob die trotzigen Burgunden
Sie krönen werden! Doch du bist der Herr! (1765-8)
そなたたちはこの宮廷で私生児を育てるつもりですか？
誇り高いブルグント族が私生児に王冠を賜っては
なりません！そなたが主君なのですから！

ゲンタール王は黙ったままなので、ハーゲンは『ニーベルンゲンの歌』において
と同じように、すべてを自分に任せるように言いのるかって、ジークフリート暗監を企図始めるのである。

IV. ハーゲンの策謀——第四幕——
その暗殺を実行するためにハーゲンがクリームヒルトからジークフリートの
秘密を聞き出すのが第四幕である。『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開であり、
ハーゲンはまず計図の手始めとして、デンマーク王とザクセン王がまたもや攻
撃寄せようとしているという虚報をジークフリートに伝える。ジークフリート
は帰国の準備に取りかかっていたが、帰国をひとまず見合わせて、再度戦闘で
の加勢を約束する。するとハーゲンは次の計図として、ジークフリートがクリ
ームヒルトに出陣の旨を話し終えるのを見計らって、クリームヒルトのもとに出
かれて、夫の身の上を案じる彼女の心を巧みにとらえる。弓の矢はほんの指先
ほどの隙間さえあれば突き刺さって、それが命取りとなることをクリームヒル
トが心配すれば、ハーゲンは次のように彼女を慰める。

Was geht das deinen Siegfried an?
Er ist ja fest. Und wenn es Pfeile gäbe,
Die sicherer, wie die Sonnenstrahlen, trän.
Er schüttelte sie ab, wie wir den Schnee！ （1995-8）

それがそのなジークフリートには何の関係があるか？
彼は実に丈夫じゃ。太陽の光よりも確実に応る。
弓の矢があったとしても、彼ならそれらを、
雪を振るい落としでもするように、払い除けることだろう！

このように慰めてくれるハーゲンに対して彼女が、「でも夫には一つの急所があ
ると歌謡に歌われていることを、あなたは忘れたのですか、それとも知らな
いのですか」（2008-10）と尋ねると、ハーゲンはすっかり忘れていたふりをして、
巧みに彼女にそのことを語らせるよう仕向けるのである。
ヘッペルの悲劇「ニーベルンゲン」三部作

Ein rascher Windstoß warf's auf ihn herab,
Als er sich salbte mit dem Blut des Drachen,
Und wo es sitzenblieb, da ist er schwach.  (2018-20)

夫が竜の血を浴びていると、突風が吹いて
菩提樹の葉が夫の身の上に落ちてきたのです。
その葉の落ちてきた箇所が、夫の弱点なのです。

誰もその箇所を知らないのだから、何を恐れる必要があるかと尋ねるハーゲン
に向かって、クリームヒルトは自らの心配を打ち明けて言うには、

Ich fürchte die Valkyrien! Man sagt,
Daß sie sich stets die besten Helden wählen,
Und zielen die, so trifft ein blinden Schütz.  (2027-9)

私はヴァルキューレたちを恐れているのです！
彼女たちはいつも最強の勇士たちを選びますし、狙われた者は
目をつぶって放たれた矢でも当たると言われていますから。

『ニーベルンゲンの歌』では記述されていない北欧神話のヴァルキューレをこ
の場面で引用しているところにヘッペルの特徴があると言えよう。ヴァル
キューレたちの恐怖から逃れるためには、ジークフリートの急所を確実に護っ
てくれる勇士が必要である。自分こそがその勇士になってあげようと、ハーゲ
ンはクリームヒルトをうまく騙して、ジークフリートの両肩の間に急所がある
ことを聞き出すことに成功するのである。狡猾なハーゲンの策略はなお続き、
「ひとたび見張り人となったからにはせばそれ許さない」(2073-4) と言って、
ジークフリートの衣装の上に小さな十字の印を縫い付けておいてくれるように
頼めば、クリームヒルトもハーゲンを信じてそれを承諾するのである。

こうしてジークフリートの弱点の秘密を聞き出したハーゲンは、『ニーベル
ンゲンの歌』において同じように、次の策略として敵が和解を申し出てきた
という虚報（2183-4）をジークフリートに伝えるとともに、狩りに出かけるこ
とを提案する（2199）。ギーゼルヘアとゲーレノートは断わるが、敵の侵攻の沙
汰止めに憤りを覚えたジークフリートは愛しき晴らしに狩りに出かけることを了
承する（2206-8）。これを知ったクリームヒルトは、夫に家にとどまるよう説得
し（2210）、出かけるならせめて衣服を着替えるよう勧める（2222-3）が、夫
はそれからの警告を聞き流す。山々が崩れ落ちてきた夢を見た（2233）と言って、
しきりに夫を引き止めようとしても、ジークフリートはただ妻を宥めながら
笑って取り合わずに、ハーゲンとともに狩りに出かけて行くのである。一人あ
とに残されたクリームヒルトは、夫に打ち明けられなかったことをただ後悔す
る（2271）のみである。

V．ジークフリートの暗殺——第五幕——
こうして最後の第五幕において展開されるのはジークフリートの暗殺であ
る。ハーゲンはオーデンの森の中で泉の水がさらさらと流れる場所を見つける
と、そこで休憩しようと提案し、徒者たちに食事の準備を命じる。角笛の合図
でジークフリートも獲物を携えてその場に集まって来る。ジークフリートはま
ず一杯の冷たいワインを所望すると、ハーゲンは飲み物を忘れできた（2373）
と言う。狩りはどこで催されるか分からなかったので、シュベッサルトの方へ
送り届けた（2387-8）というのである。『ニーベルンゲンの歌』とはほぼ同じ展
開であるが、暗殺前後の状況については多少の改作が施されている。すなわち、
ジークフリートは「せめて水でもないのか」（2390）と不平を述べるが、ハー
ゲンから勧められるままに耳を澄ませると、泉の水が湧き出る音が聞こえてく
る。ジークフリートは喜び勇んで泉の方に駆け寄ろうとするが、「クリームヒ
ルトの一件では済まないことをした」（2404）ので、その償いとして最後に飲
むことを申し出る。そこで最初に泉の水を飲むこととなったのがハーゲンであ
る。ハーゲンは泉に近づいて水を飲もうとするが、「尻まねっぽうく飲めない」
（2409）と言って、一度引き返し、武具を置いてから再度泉に近づく。ハーゲ
ンが水のように冷たい水を飲んだあと、他の者たちはまず食事をしたいと言い
出したので、二番目にはジークフリートが喉の渇きをいやすこととなった。ハー
ゲンと同じように、ジークフリートも武具を置いて泉に近づき、冷たい水を飲
もうとして、身を屈める。その瞬間、ハーゲンがたちまちはしまをつけて自ら
の槍をジークフリートの背中へがけて投げつけるのである。ジークフリートは
呼び声を上げて、卑怯な暗殺行為を罵りながら、せめて剣を返して勇士らしく
勝負をするようにと願い出るが、ハーゲンはもちろんそれに応じない。ジーク
フリートは地面に打ち倒れて、なおも続けて言う。

･･･ Den Siegfried seid ihr los!
Doch wisst, ihr habt in ihm euch selbst erschlagen.
ヘッペルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

Wer wird euch weiter traun! Man wird euch hetzen,
Wie ich den Dänen wollte—  (2444-7)

・・・このジークフリートをよくも片づけやがったな！
だが、お前たちはお前たち自身をも殺したということを知るがいい。
もはや誰がお前たちを信用しようか！私がデンマーク勢を
倒すがごとく、お前たちも倒されることになるのだ—

ジークフリートは、しかし、デンマーク勢との戦いが策略であったことをハー
ゲンから聞かされると、不実なブルゲント族を呪いながら、最後に妻クリーム
ヒルトの行く末を案じて、こう叫ぶ。

Mein Weib! Mein armes, ahnungsvolles Weib,
Wie wirst du's tragen! Wenn der König Gunther
Noch irgend Lieb und Treu zu üben denkt,
So üb er sie an dir! —Doch besser gehst du
Zu meinem Vater! —Hörst du mich, Kriemhild? (2459-63)

わが妻よ！あわれにも、不安に悩まされるわが妻よ、
そなたはこれをどのように耐えるのか！ゲンター王が
なんらかの愛と誠を尽くしてくれるつもりなら、
彼がそなたにそれを見せてほしい！——否、そなたはわが父のもと
に行くがいい！——クリームヒルトよ、聞こえているか？

このようにクリームヒルトの身を案じながら、ジークフリートはついに息を引
き取るのである。ハーゲンは山中で追討ぎがジークフリートを殺害したという
ことにして、その亡骸をクリームヒルトのもとに運ぶよう命じる。多少の相違
はあれ、大筋においては素材の『ニーベルンゲンの歌』の展開とほぼ同じこと
が容易に理解されるよう。

一方、クリームヒルトについても多少の改作はあれ、ほぼ『ニーベルンゲン
の歌』と同じである。夫が狩りに出かけて、ただならぬ予感に怯える彼女は、
まだ夜が明けぬうちから起き上がって、早く礼拝堂へ出かけて祈りを捧げたい
気持ちである。母ウーテも同様に今朝はなんとなく騒々しい気がして寝てはい
られない。二人が不安を抱きながら話しているところへ、下僕が入って来て、
戸口の前に死骸が置かれていることを報告する。それを聞いたクリームヒルトは、『ニーベルンゲンの歌』においてと同じように、ただにそれがジークフリートであることを察し、しかもブルンヒルトの指図によって、伯父ハーゲンのなした業である（2518）ことを悟る。彼女はしばらくジークフリートの死骸にすがりついて悲嘆に暮れていたが、やがてゲンター王がその場に姿を現すと、彼女は兄ゲンターに向かってこう言う。

・・・Es waren also Schächer?
So stell dich dort mit allen deinen Sippen
Zur Totenprobe ein. (2597-9)

・・・追剝ぎの仕業だったのですね？
それではあなたの一族すべてとともに
死骸の裁きを行っていただきましょう。

こうしてクリームヒルトは夫の亡骸を棺台に乗せて礼拝堂へ運び込むと、司祭に「事実と正義を求めてやって来た」（2612）ことを告げる。この司祭は『ニーベルンゲンの歌』ではドーナウ河渡河の場面（第25歌章）にしか登場しないが、ヘッベルの戯曲ではすでに第二部第四幕及び第五幕に登場して重要な役割を果たしており、この場面でも司祭はクリームヒルトの心のうちに復讐の意志を読み取ると、彼女を教え論して次のように言うのである。

Du suchst die Rache, doch die Rache hat
Der Herr sich vorbehalten, er allein
Schaut ins Verborgne, er allein vergilt！ (2613-5)

あなたは復讐を求めておられる。しかし、復讐は
神様がなされるもので、隠れたものを見て、
報復することができるのは神様だけです。

このあと司祭は全世界の罪をかが身一人に引き受けた神の愛と慈悲を説いて聞かせるものの、クリームヒルトは司祭が語り終えるや否や、死骸の裁きを敢えて行うのである。ハーゲンはその死骸の裁きを侮っていたが、いざジークフリートの死骸に近づくと、その傷口からは新たに血が流れ出した。これによって暗
第三部 クリームヒルトの復讐

I. クリームヒルトの再婚——第一幕——

第三部は第二部と同様に五幕から成り、クリームヒルトの復讐を取り扱っている。第二部と第三部との間にはどのくらいの歳月が経過しているかについては、はっきりした記述は見られないが、クリームヒルトはジークフリートとの間に生まれた息子を祖父のもとに預けたことになっている（vgl. 3017-9）ことを考慮に入ると、ある程度の歳月が経過しているものと考えてよいであろう。第三部のあらすじの展開は『ニーベルンゲンの歌』とはほぼ同じと言ってもよいが、もちろん劇曲化に伴い、削除された場面も当然多くあり、第一幕はいきなりペッヒェラーレンの辯論者リューテデガールが使者としてブルグント国に到着した場面から始まっている。リューテデガールは、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、王妃ヘルケを亡くしたフン族のエッツェル王がクリームヒルトと求婚している旨を伝えるためにヴォルムスへやって来たのである。ゲンター王からクリームヒルトが寡婦の身であることを聞かされると、リューテデガールはすでにそれを承知の上で次のように答える。

Wie Etzel Witwer, ja! Und eben dies
Verbürgt dem Bund der beiden Heil und Segen
Und gibt ihm Weihe, Adel und Bestand.
Sie suchen nicht, wie ungeprüfte Jugend
Im ersten Rausch, ein unbegrenztes Glück.
Sie suchen nur noch Trost, und wenn Kriemhild
Den neuen Gatten auch mit Tränen küßt,
Und ihn ein Schauder faßt in ihren Armen,
So denkt sich jedes still: Das gilt dem Toten!
Und hält das andre doppelt wert darum. (2739-48)

エツェル王とて同様に男やもめ！だからこそ
二人の結婚には至福と祝福が保証され、
神聖さと品位、そして永遠性がもたらされるのです。
お二人が求めるのは、未経験な若者が
最初から有頂天になって無限の幸せを求めるのと異なって、
慰めというものだけです。たとえクリームヒルト様が
新しい夫に涙ながらに接吻しようとしても、
また新しい夫が彼女を腕に抱いて身震いしようとも、
それは亡き人へ向けられたものだと、ご両人が静かに思えば、
そのためにかえって価値も二倍に増すというもののです。

ヘッペルらしい人生論風な表現となっており、ゲンター王もまったく同意を示
すが、しかし彼はクリームヒルトがジークリートを失った日から日日に至る
まで自分たちのところへは姿を見せずに、ロルシュ修道院の亡き夫の墓へ詣で
る毎日であることを伝える。するとリューデゲールは、自らが直接クリームヒ
ルトに会って、エツェル王の望みを彼女に伝えることにしてその場を退くの
である。

このクリームヒルトの再婚に猛反対をしたのが、「ニーベルンゲンの歌」に
おいてと同様、ハーゲンである。彼の意見は、クリームヒルトをフン族へ行か
せるくらいなら、彼女を鎮で縛りつけておいた方がよい（2769-70）というの
である。ジークリート暗殺以来、彼女はハーゲンに握手をしないどころか、
ゲンター王に対しても接吻の挨拶さえしたことがない（2775-7）ことをハー
ゲンは指摘する。これに対してゲンター王はハーゲンの助言こそ呪わしく、当
時自分がもっと大人であったら、あのように目をくらまされることはなかった
ろう（2789-91）と後悔する。ゲンター王はハーゲンの助言に従ったがゆえに、
ブルンヒルトは飲んだり食べたりしているに、またルーヌ文字に読み耽ってい
ても死骸も同然である（2815-6）ことを訴える。そしてこの一族の恥辱を拭い
落としてくれるのがエツェル王との縁組である（2841-2）と考えて、ゲンター
王はこの求婚に積極的な姿勢を見せるのである。クリームヒルトが恨みを晴ら
さずにはいない（2854-5）とハーゲンに指摘されても、ゲンター王は「我々は
仲直りをしたのだ」（2861）と答える。これに対してハーゲンは、クリームヒ
ルトが仲直りのぶりを見せたのも弟君ギーゼルヘアが毎日に頼み、母君
ウーテが泣いてすがりついたからだ（2873）と言って、かえって「その仲直りは新たな費用の項目として加わり、借金はいっそう大きくなったのだ」（2876-7）と言い張る。そしてジークフリートの所有していた黄金をクリームヒルトから取り上げたのも、「それでもって彼女が軍勢を募ることは訳のないことであった」（2912-3）からだとハーゲンは主張する。このようなハーゲンの主張に対して母後ウーテは、接吻による神聖な約束を汚すようなクリームヒルトではない（2881-2）ことはもちろんのこと、クリームヒルトが黄金をばらまいたのも「ジークフリートの供養のため」（2919-20）だと言って、娘には復讐する意志など少しもないことを信じ込んでいる。結局のところ、ゲンター王もハーゲンの警告を退けて、まずは母後ウーテにクリームヒルトのもとに出かけて行って、この縁談の話を切り出すよう依頼するのである。
こうして母後ウーテは娘クリームヒルトを訪れるが、なかなか話切り出すことができない。そのうちギーゼルヘアとゲーレノートが加わって、やっとのことでエッツェル王の求婚を伝え、三人一緒になってクリームヒルトを説得しようとすると、彼女はそれを断固として拒否する。それどころか続いてそこにやって来たゲンター王に向かっては、「命のある限り、トロニエのハーゲンを訴えます」（3172-3）と言い張るばかりである。
このようにクリームヒルトは断固拒否していたが、しかし、そのあと使者リューデゲールに面会すると、一転して再婚の承諾を与える。そのきっかけとなったのは、——この点で素材の『ニーベルンゲンの戦』とは若干異なるのであるが——ハーゲンがこの再婚に反対していることを先にゲーレノートとギーゼルヘアから聞いていたからである。使者に出会う前に、彼女は次のように独り言を呟いている。

Und Hagen Tronje, hör ich, fürchtet mich! —
Du könntest Grund erhalten! Mag die Welt
Mich anfangs schmähn, sie soll mich wieder loben,
Wenn sie das Ende dieser Dinge sieht! (3231-4)

そしてハーゲン・トロニエは、聞けば、私を恐れているようだ！
恐れる理由を分からせてやろう！世間は最初のうちは
私を罵るかも知れないが、この事の成り行きを見れば、
再び私をほめ称えることであろう！
ここですでにクリームヒルトはエツェル王の力を借りてハーゲンに仕返しをすることを決意していると言ってもよいであろう。使者リューデゲールに面会し、地上で国境というものを持たないような王国（3265-6）を提供されても、彼女はそれ以上のものを要求して、次のように尋ねる。

Herr Etzel wird mir keinen Dienst versagen? （3273）
エッフェル殿は私にどんな奉仕をも拒みはしないでしょうね?

エッフェル王の奉仕のみならず、リューデゲールにも奉仕を要求すると、彼は答えて言う。

･･･Was ich vermag,
Ist dein bis auf den letzten Odemzug. （3274-5）

･･･私にできることなら、
この息の続く限り、あなたのためにしてあげます。

誓いを催促すると、リューデゲールはしかと誓った（3276）ので、クリームヒルトはついに決意し、さっそく母后と兄弟を呼び寄せ、皆の前でエツェル王の妃になることを表明する。クリームヒルトはさらにグンター王たちにフン族の国まで一緒に行きしてくれるかと尋ねるが、グンター王はライン地方を去るわけにはいかないので、ひとまずリューデゲールにすべてを委ねて、いずれ自らが訪問することを約束する。結局のところ、クリームヒルトは忠義者の老僕エッケヴァルトだけを連れてフン族の国へと旅立つことになるのである。

II．ブルゲント族の旅——第二幕——

第二幕冒頭の舞台はクリームヒルトがエツェル王に嫁いでから7年後のドーナウ河畔である。楽人ヴェルベルとスヴェムメルを使者としてフン族の王妃クリームヒルトから饗宴に招待されたブルゲント族は、今やドーナウ河に達し、渡河を終えようとしているところである。この渡河の場面に関してもヘッペルは大筋において素材の『ニーベルンゲンの歌』の展開を踏襲している。ただしブルゲント族の旅には先の二人の楽人も同行しているが、使者としての役目を果たした二人はこのドーナウ河を渡り終えたところで、先を急ぐからと言って、グンター王に暇乞いを告げて一足先にフン国に向かうことになっている。
ヘッブルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作

ル。そうしているうちにハーゲンは船で最後の荷物を運び終えるが、荷揚げが済むや否や、彼は再び船の中へ躍り込み、司祭めがけて飛びかかって、司祭を水中に突き落としてしまう。『ニーベルンゲンの歌』とはほぼ同じ展開であり、司祭は片腕が不自由であったにもかかわらず魚のように上手に泳ぐことができ、無事に向こう岸に辿り着いて、別れを告げて国元へ帰って行った。するとハーゲンは剣を引き抜いて、船を粉々に打ち砕いてしまった。これに驚いたゲンター王がわけを尋ねると、ハーゲンは渡船を探しているうちに水の乙女たちに出会い、一度目は彼女たちからよい予言を聞いたものの、二度目には次のような不吉な予言を聞いたからだと答える。

Höhnten sie mich: Wir haben dich betrogen.
Ihr alle seht, wenn ihr ins Heunenland
Hinunter zieht, den grünen Rhein nicht wieder.
Und nur der Mann, den du am allermeisten
Verachtet, kommt zurück. (3422-5)

彼女たちはわしを罵って言ったのだ。「先程は嘘をついたのです。
あなた方は皆、フン国へ下って行かれるなら、
二度と緑のライン河畔へは戻れないことをご承知おきください。
あなたが最も嫌っている男の人だけが
戻ることになっているのです」と。

ハーゲンが最も嫌っている男とはもちろん司祭のことである。ハーゲンはこのような予言に対して「帰国するのを忘れぬくらいに異国の地が我々には気に入ることであろう」（3427-8）と皮肉をこめて答えたものの、ハーゲンはやはりよからぬ結果になると思っていたのである。ハーゲンはさらに自分の額に赤い血がついているのを見咎められて、渡し守をも殺害していたことを打ち明け
る。このバイエルンの豪傑ゲルフラートは大きな糧を振り回して飛びかかってきたので、ハーゲンは自らの剣で仕返しをして、彼らの船と同時に粉々に打ち砕いてやったのである。ゲンター王はこれを聞くと、早くこの地から立ち去る必要があることを口にするが、ハーゲンは「いずれにせよ、我々は死の網に絡
みついている」（3460）ことを一緒に悟らせる。フォルケールがこのハーゲン
の言葉に賛同すれば、ハーゲンは彼をほめ称えて言う。
Das ist ein Wort, mein Volker, habe Dank.
Jawohl, wir waren's stets, es ist nicht neu,
Und einen Vorteil haben wir voraus
Vor all den andern, welche sterben müssen:
Wir kennen unsern Feind und seh'n das Netz— (3461-6)

よく申した、フォルケールよ、ありがとう。
その通りだ、最初からそうだった、今に始まったことではない。
それに我々には、死んでいかねばならない
ほかのすべての人たちにもまして一つの利点がある。
我々は敵を知っており、戦を見抜いているということだ——

言葉こそ違え、ハーゲンが死を覚悟した言葉によって一行の者たちを奮い立たせているという点では、『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じである。こうしてブルグント族は覚悟を決めてフン国への旅を続けるのである。

ブルグント族が次に滞在するのは、『ニーベルンゲンの歌』と同様、辺境伯リューデゲールの居城ベヒラルンである。ただヘッベルの戯曲が『ニーベルンゲンの歌』と異なるのは、このベヒラルンの地にディートリヒがヒルデブラントともにすでに現れていることである。彼の役割はもちろんブルグント族にクリームヒルトの企みを警戒するために忠告することである。ディートリヒがリューデゲールに導かれてゲテリンデ夫人とその娘ゲートルーネから歓迎の挨拶を受けているうちに、ブルグント族が到着する。このリューデゲールの居城においても際立って注目を浴びるのは、ハーゲン、すなわち、娘ゲートルーネが形容している言葉を用いれば、「死人のように窪んだ目をしている青ざめた男」（3593）のハーゲンである。ハーゲンは一気に挨拶を済ませると、一つの珍しい楯に興味を示す。その楯を壁より取り外して手にしてみると、ずしりと重い。それはリューデゲール夫人ゲテリンデの父ヌードゥングの遺品であった。それを知ったハーゲンは「彼の死がまことに残念でならぬ。生きていたらわし自身が、失礼だが、彼を殺害していたかも知れぬ。強情な英雄であったに

10) ヘッベルの戯曲ではこの二人のほかにイーリンクとチューリンクがエッフェル王の使者としてこの地を訪れている。前者の二人は自ら進んでこの地にやって来たのに対して、後者の二人はエッフェル王の命令によって客人たちを出迎えに来たものである。
違いない」(3645-7) と言いながら、その楯を再び壁に掛けようとすると、リューデガール夫妻はそれをハーゲンに贈ることにした。それを聞いたハーゲンは「勇敢なジークフリートがわしに遺したパルムンクの剣にこの楯ばりったりであろう」(3650-1) と答える。ハーゲンが口にする一言一言が反抗精神に満ちた英雄の言葉であることが容易に理解できるよう。

このリューデガールの居城でのもう一つの重要な出来事は、『ニーベルンゲンの歌』と同じように、ブルゲント族の王弟ギーゼルヘアとリューデガールの娘グートルーンとの婚約である。『ニーベルンゲンの歌』ではこの婚約を勧めるのはハーゲンであるが、ヘッペルの戯曲ではフォルケールがその役目を果たしている。フォルケールは娘グートルーンを初めて目にしてしたときあわててふためいた男をゲーレノートだと思い込んでいたが、彼女、そう思い込むふりをしてギーゼルヘアの心を撹き立てたのだと読み取ることもできる——それがギーゼルヘアだと分かると、さっそくギーゼルヘアとグートルーンを結びつけるようとする。フォルケールの意図は、そのあとでの独り言（3693-4）からも分かれるように、ブルゲントの王弟とリューデガールの娘グートルーンを結びつけることによって、エッツェル王の忠実な家臣リューデガールを味方にしておくことであるから、王弟はゲーレノートでもギーゼルヘアのどちらであってもよかったのである。幸い、ギーゼルヘアが積極的な姿勢を示して、自分自身でリューデガールに娘との結婚を願い出たので、すべてが順調に進んだ。しかもそれにハーゲンとゲンター王が口添えをし、娘の気持ちを汲み取ったリューデガールも承諾したので、婚約はたちまちのうちに成立し、婚礼はフン族の国から戻って来てから挙げることとなった。このように婚約が整ったところで突如としてディートリヒが歩み寄り、「クリームヒルト王妃はいまだに昼夜泣き通している」(3758) と知らせて、王妃の企みを警戒するように忠告する。これを知ったゲンター王はハーゲンに「お前一人がその気になれば、我々は助かるのだ」(3778) と言って、一人で国元に帰るよう依頼する。しかし、それを受け入れるハーゲンではないことは、最初から明らかである。ゲンター王自らも実はハーゲンと同じ意地に駆られてフン族の国へ出かけるのであり、ハーゲンが断固として帰国を拒否すると、ゲンター王はハーゲンの脅を叩きながら覚悟を決めてフン族の国への旅を続けることを一同に知らせるのである。

Ⅲ. クリームヒルトの出迎え——第三幕——

フン族エッツェル王の居城では使者ヴェルベルとスヴェムメルが一足先に到着して、王妃クリームヒルトにブルゲント族がこちらに向かっていることを報
告する。それによれば、先頭に立って道案内しているのはハーゲンである。クリームヒルトは一行が到着したら即座に策略を弄して武器を取り上げるよう指示するとともに、ニューベルンゲンの財宝を報酬としてヴェルベルとスヴェムメルにハーゲン殺害をけしかける。彼女はさらに使者たちにブルンヒルト王妃の消息を尋ねる。ヴェルベルが報告するところによると、ブルンヒルト王妃は死去しているわけではないのにジークフリートの墓所に入れて（3815）、柩のそばにしゃがみ込んでいる（3820）という。そして目には涙をいっぱいで溜め、あるときには爪で頬を、またあるときは柩の板をかき消したりしており、ゲンター王がその入口を塞ぐように命令したときには、乳母フリッガが急いで戸口に立ち塞がった（3824-6）という。最後に、クリームヒルトは母ヴーテの消息を尋ねる。母ヴーテは言伝として雪のように真っ白な髪の毛（3831）を使者たちに預けていたのである。そのような言伝を寄こした事情をヴェルベルが説明して語るとところによると、一族が出立する前夜に母后ヴーテはすべての鳥が空から落ちて死に絶えた夢を見た（3835-7）からだという。そしてそれらの鳥は子供たちが、秋に枯葉をかき集めるように、足でかき集めて、地に埋めたという。クリームヒルトはその母の言伝が「兄弟たちを長く引き止めてはならぬ」（3829-30）という意味であることを悟りはするものの、自らにとっては吉兆だと思って、ただにヴェルベルとスヴェムメルに向かって出迎えの準備に取りかかるよう命ずるのである。

二人の使者が立ち去ると、次にはエッフェル王が従者とともにクリームヒルトの前に現れる。エッフェル王は王妃の身内をどのように出迎えたらよいか、遠慮なく望むところを申し出るように言う。エッフェル王はクリームヒルトと再婚して七年になるが、その間に王妃が世縁ぎとして息子を産んでくれたので、王妃の望むことは何でも適えてやろうというのである。そこでクリームヒルトはすべてのことを自分に任せてほしいと望んで、次のように言う。

Vergönne denn, daß ich sie nach Verdienst
Und Würdigkeit empfange und behandle,
Ich weiß am besten, was sich für sie schickt,
Und sei gewiß, daß jeder das erhält,
Was ihm gebührt, wie seltsam ich das Fest
Auch richten und die Stühle setzen mag. (3888-93)

では、私が功績と品位に従って
彼らを出迎え、もてなすことをお許しください。
彼らは何がふさわしいかは私が最もよく知ってますから。
そして、たとえ私がいかに奇妙な饗宴を催し、
椅子の並べ方も奇妙だとしても、それが各人には
ふさわしいのだということを確信してください。

このたびの一族招待はもっぱらクリームヒルトの願いによるものだから、エッテル王も王妃の好きなようにするがよいと言って、一族歓迎に関するすべてのことをクリームヒルトに委ねるのである。ただエッテル王の唯一の願いとして、七年前からこのフン国に客人として滞在しているディートリヒだけには敬意を表してほしいと言い渡す。クリームヒルトもそれを承諾したところへ、ブルゲント族がまもなく到着する旨の報告がもたらされる。クリームヒルトはさっそく自らが一族を出迎えて邸屋に案内するので、エッテル王はここで待っていてほしいと言い残して、一族を出迎えに行くのである。

今やニーベルンゲン一族とも呼ばれるブルゲント族は、ディートリヒとリューデゲールの案内によって城の前庭に到着する。そこへクリームヒルト王妃が多くの従者を伴って一族を出迎えるが、その言葉は最初から皮肉に満ちている。

Seid ihr es wirklich? Sind das meine Brüder?
Wir glaubten schon, es käm ein Feind gezogen,
So groß ist euer Troß. Doch seid gegrüßt！　（4008-10）

本当にあなた方ですか？私の兄弟ですか？
私たちはっきり敵が押し寄せたものと思っておりました。
とても大勢なものですから。でもよこそおいでくださいました！

クリームヒルトは弟ギーゼルヘアには接吻の挨拶をし、案内役のディートリヒには礼を述べて手を差し出したが、そのほかの者には誰にも接吻せずに、また抱擁もしなかったので、ハーゲンは主君と家来への挨拶の仕方が異なると言っ
て、兜の緒をさらにしっかりと結びつけた。「そなたも来たのか？誰がそなた
を招待したのか？」（4020）というクリームヒルトの問いに対して、ハーゲン
も負けずに答えて言う。
Wer meine Herren lud, der lud auch mich!
Und wem ich nicht willkommen bin, der hätte
Auch die Burgunden nicht entbieten sollen,
Denn ich gehör zu ihnen, wie ihr Schwert.    (4021-4)

わしの主君を招いた者は、わしをも招いたことになるのじゃ！
わしを歓迎せぬ者は、ブルゲント一族をも
呼び寄せるべきではなかったのじゃ。
わしは、剣と同様に、彼らの一員のだから。

最初の出迎えの場面からすでに二人は激しく対立していることが明らかである。「ニーベルンゲンの宝はどこにある？あの宝を運ぶにはこれほど多くの軍勢が必要であったろう。さあ、渡してもらおう」(4034-6) と言って、クリームヒルトが財宝を要求すれば、ハーゲンは次のように答える。

Was fällt dir ein? Der Hort ist wohl bewahrt,
Wir wählten einen sichren Ort für ihn,
Den einzigen, wo’s keine Diebe gibt,
Er liegt im Rhein, wo er am tiefsten ist.    (4037-40)

なんということを思いつかれる？宝は大切に保管されている。
我々は宝にとって安全な場所を選んでいる。
泥棒もいない唯一の場所じゃ。
宝はライン河の最も深いところに沈んでいるのじゃ。

「そなたは、今度の旅には自分が必要だと言っていたが、財宝は必要でなかっ
たのか」(4043-4) と尋ねるクリームヒルトに対して、ハーゲンはまたもや次
のように答える。

Wir trugen allzu schwer an unserm Eisen,
Um uns auch noch mit deinem Gold zu schleppen,
Wer meinen Schild und meinen Panzer wiegt,
der bläst das Sandkorn ab und nicht hinzu.    (4053-6)
我々は自分たちの武具でさえも重過ぎたので、
そのうえそなたの黄金まで運ぶことはできなかったのじゃ。
わしの楯と鎧の重さを計ってみたら、
砂粒さえ吹き落として、付け加えたくないくらいなのだじゃ。

皮肉に満ちたこのハーゲンの言葉にクリームヒルトも負けてはいない。「では、
それを脱いで、私について広間に入ってもらいましょう」(4059-60) と言って
武具を取り上げようとする。これに対してハーゲンが答える言葉もまた皮肉に
満ちている。

Nein, Königin, der Waffen nehm ich mit,
Dir ständen Kämmerdienste übel an! (4061-2)

いや、王妃様、武器は自分で持ちまする。
そなたに小間使の世話をしてもらっては申し訳ない！

ハーゲンがどうしても武器を手渡す意志のないことを見て取ったクリームヒルトは、「誰か改めり者がいて警告したのであろう」(4066) と言って、その警告
者を非難すれば、ディートリヒが警告したのは自分であると名乗り出る。エッ
ツェル王からディートリヒだけには礼を尽くすように言われていたクリームヒルトは、警告者に不平を申し述べることはできても、それ以上の行動に出て
ディートリヒを罰することはできない。それどころかディートリヒはブルゲン
ト族を案内してその場を立ち去るのであり、クリームヒルトはただそのさまを
見ていなければならないのである。

こうしてブルゲント族はエッツェル王の居城にひとまず落ち着くが、エッ
ツェル王に謁見したハーゲンによると、エッツェル王はとても柔和にててなし
てくれた(4200-1) という。ハーゲンの考えるとところでは、エッツェル王は実
直であることを誇りとしているので、エッツェル王の意志で自分たちを裏切る
ことはないであろう(4212-4) が、しかし楽人ヴェルベルなどの様子からも窺
い知れるように、足もとは安全ではなく、踏み出すところではどこでもとよめ
いていっている(4218-9)。そこでハーゲンはクリームヒルトの陰謀を警戒して、『ニー
ベルンゲンの歌』においてと同様、その夜はフォルケールとともに寝ずの番を
する。一方、クリームヒルトの方もヴェルベルを連れて小高い階段の上に姿を
現して、相手の隙を見つどものの、ハーゲンとフォルケールの姿を見て、ひとま
ず攻撃することを見合わせるのである。

IV. クリームヒルトとハーゲンの対立——第四幕——

第四幕は第三幕の最終場面に続くものであり、深夜、ハーゲンとフォルカー
ルは対決の番をしている。フォルカーはヴァイオリンを奏でながら昔の物語
を語り続けている。ハーゲンは依然として腰かけたまま、フォルカーの物語
に耳を傾けながら、その内容に関して問いかけをしているうちに、それがニーベルンゲンの財宝にまつわる物語であることを悟る。そうしているところへクリームヒルトが従者たちを連れて階段を降りて来る。フォルカーは立ち上
がって王妃に挨拶しようとすると、ハーゲンはそれを押し止める。『ニーベルンゲンの歌』においてと同様、ハーゲンは恐れて立ち上がったと思われるの
が嫌なのであり（4349-50）、逆にジークフリートの持ち物であったバルムンク
の剣を膝の上に置いてクリームヒルトを煽り立てようとするのである。それど
ころかハーゲンはクリームヒルトから彼女の夫殺しを訴えられると、とばけて
次のように答える。

・・・Weckt sie auf,
Sie geht im Traum herum. Dein Gatte lebt,
Ich habe noch zur Nacht mit ihm gezecht
Und stehe dir mit diesem guten Schwert
Für seine Sicherheit.  (4356-60)

・・・王妃を目覚めさせるのだ。
彼女は夢の中をさまよっていなさる。そなたの夫は存命じゃ。
わしは今宵国王と一緒に宴の席で盃を交わしたばかりじゃ。
この立派な剣にかけて国王の安全は
保証いたします。

これに対してクリームヒルトが、「誰のことを言ったのか、知っているくせに、
知らぬふりをしている」（4360-2）と怒りを示せば、ハーゲンはさらに続けて
嘲るように言う。

Du sprachst von deinem Gatten,
Und das ist Etzel, dessen Gast ich bin.
Doch, es ist wahr, du hast den zweiten schon.  
Denkst du in seinem Arm noch an den ersten?  
Nun freilich, diesen schlug ich tot.  

そなたは夫じゃと申したが、  
それはエッフェル塔で、わしがお世話になっている人じゃ。  
いや、確かに、彼は二人目の夫であったな。  
そなたは彼の腕の中で最初の夫のことを考えているのかなか？  
もちろんのことじゃ、最初の夫はわしが殺したのじゃ。

クリームヒルトを嘲りながら、ハーゲンはこのように自らがジークフリートを  
殺害したことを公然と口にするのである。それどころかハーゲンによる嘲りの  
言葉はなお続く。クリームヒルトは従者たちに斬りかかるように命じるが、フン  
族はバルムンクの剣を抜き放ったハーゲンにおいしにて攻撃できないままで  
いる。クリームヒルトから意気地のない奴じゃと言われたヴェルベルは、再度  
軍勢を率いて攻撃をしかけようとしているところへ、ゲンター王が騒ぎを聞き  
つけて、寝間着を着たまま兄弟たちとともに現われる。  
　クリームヒルトは兄ゲンターに向かってまずハーゲンの裁判を要求するが、  
それを拒否されると、次にはハーゲンを自分に引き渡すよう要求する。しかし、  
ゲンター王は「彼の運命は我々の運命だ」（4448-9）と言って、きっぱり拒否  
する。妹クリームヒルトにはこれまで従順だったギーゼルヘアもまた、次のよ  
うに言って妹を諦める。

・・・Wir häuften ew’ge Schmach  
Auf unser Haupt, wenn wir den Mann verließen,  
Der uns in Not und Tod zur Seite stand. （4451-3）

・・・我々がこの男を見捨てでもしたら、  
我々は永遠の恥辱を頭の上に積み重ねることになります。  
彼は死の窮地に立たされても我々に味方してくれたのですから。

このように最も頼りにしていたギーゼルヘアにも助力を拒否されたクリームヒ  
ルトは、今や兄弟もハーゲンと同類の仇敵と見なしして、ハーゲンの首を取る  
ためには、「たとえ百人の兄弟を打ち倒すことになろうとも、それを実行し、
自分は誠実のためにのみ誠実を破ったのだということを世間に知らせてやる」(4514-7)と言い残して、その場を立ち去って行くのである。

翌朝、クリームヒルトは夥しい宝石をばらまいて、ヴェルベルをはじめとする多くのフン族の兵士たちを奮い立たせる。祈祷の時刻となって、ブルグント族が礼拝堂に向かう途中、フォルケールが槍を投げつけて一人のフン人を刺し殺したことから、双方の兵士たちが騒ぎ立った。そこでエッテル王が現われて、フン族の兵士たちに武器を渡ると命じる(4679)。エッテル王は深夜の騒動をディートリヒから聞き知ってクリームヒルトの企みにようやく気づいたのであるが、彼としては客人に危害を加えることはできない。エッテル王の介入により、この場はひとまず何事も起こらずに、ブルグント族はディートリヒの案内で礼拝堂に入って行く。その間、クリームヒルトはリューデゲールに誓いを思い出しさせる(4703)。それを聞いたエッテル王自身も、リューデゲールが誓ったことは自分も守る(4706)が、しかし、ブルグント族が客人である限りは少しの危害を加えることはできない(4722-3)と言う。彼らが客人でなくなったら、神聖を汚すことになる(4725)と言って、エッテル王は王妃を教え諭すのである。

このようにエッテル王はヘッベルの軽曲では『ニーベルンゲンの歌』においてよりもかなり温和な人物として描かれているのであるが、しかし、このような柔的な国王もまた昔の蛮人に戻ることとなる。そのきっかけとなったのが、その夜に大広間で催された晩餐における出来事である。クリームヒルトは王子オトニートを宴の席に呼び出させて、客人に紹介する。やがてその王子がハーゲンに紹介されて、その腕に抱かれると、ハーゲンは「この子は長生きしないだろう」(4942)と言い出して、次のように続ける。

Ihr wisst, ich bin ein Elfenkind und habe
Davon die Totenaugen, die so schrecken,
Doch auch das doppelte Gesicht. Wir werden
Bei diesem Junker nie zu Hofe gehn. (4943-6)

皆様もご覧の通り、わしは妖精の子で、
そのため怖い死人のような目をしているが、
しかしその目の知人は二倍だ。我々は
この貴公子の宮廷に伺候することはあるまい。
このような言葉を聞いたクリームヒルトが皮肉に満ちた言葉を返しているうち
に、ダンクヴァルトが鎧兜を血だらけにして現れ、ゲンター王に外のプルゲン
ト勢が一人残らず討ち取られたことを報告する（4953-5）や否や、ハーゲンは
起立して剣を抜き、王子オトニートの首を斬り落としたのである。すがのエッ
ツェル王もこの仕打ちには我慢がならずに、昔の蠻人に立ち返ってプルゲント
族に戦いを宣言し、ここに両族あげての戦いが始まるのである。

Ⅴ．プルゲント族とフン族の戦い——第五幕——
こうして戦いはもはやクリームヒルトとハーゲンとの戦いではなく、フン族
とプルゲント族との戦いとなる。この両族あげての戦いに関しても、展開は
『ニーベルンゲンの歌』とほぼ同じである。すなわち、大広間には火がつけら
れて、真っ赤に燃え続けたあとは炎に包まれている。この国にやって来たプル
ゲントの兵士たちは七千人のフン族とともに倒れてしまったが、ハーゲンをは
じめ、プルゲントの国王たちは辛うじて大広間の中から逃れて出口のところに
辿り着く。ハーゲンは喉が渇いたり死人の血を啜って喉の渇きをいやすがよい
（4996-8）と助言する。そこへクリームヒルトが現れ、ハーゲンは野外で堂々
と戦ってもらいたいと願い出る（5082）が、彼女はもちろんそれを許さない。
そのあとエッツェル王もその場に姿を現すが、大広間に火をつけたのは国王の
意志によるものかというハーゲンの質問に対して、エッツェル王は、フン族の
戦死者のみならず、「王子の遺骸さえも引き渡してくれなかった」（5089-90）
ので、「火葬にしたまでのこと」（5091）と答えてから、はっきりと王妃クリー
ムヒルトに向かっても次のように言う。

・・・Stamm um Stamm！
Sie haben meinen ausgelöscht, sie sollen
Auch selbst nicht fortbestehn.（5101-3）

・・・血族には血族をもってじゃ！
彼らはわし一族を消し去ってしまったので、
彼ら自身にも生き延びさせてはならない。

温和なエッツェル王も今や昔の蠻人に返って、プルゲント一族を全滅させよう
としていることが明らかである。
このエッツェル王の参戦によって両族の板挟みとなってこのうえない苦しみ
を味わわねばならないのがリューデゲールである。このリューデゲールについ
ても、悲劇的状況は「ニーベルンゲンの歌」とほぼ同様である。すなわち、リュー
デゲールは一人のフン族の兵士を追い立てて登場すると、その兵士をこぶしで
もって殴り殺してしまう。エッフェル王がそれを咎めると、リューデゲールは
その者に口先だけの家来に過ぎないと罵られたので、懲らしめたのだと言う。
それを聞いたクリームヒルトは、次のように言ってリューデゲールを責める。

Herr Rüdeger, die Strafe war zu hart,
Denn viele, wenn nicht alle, denken so,
Und eine beße Antwort wär’s gewesen,
Wenn Ihr sogleich das Schwert gezogen hättet,
Um auf die Nibelungen einzuhaun. (5119-22)

リューデゲール殿、その罰は厳し過ぎたようだ。
皆とは申しませぬが、大方の者はそのように考えているのだから。
返答としては、そなたがすぐにでも剣を引き抜いて
ニーベルンゲン族に向かって殴り込んだ方が
ずっとよかったのではありませんいか。

自分が彼らをこの国に案内したことをリューデゲールが口にすれば、エッフェ
ル王は「案内した当人であるからこそ彼らを片づけるのも当然なのだ」(5125)
と言う。さらにクリームヒルトからかつての誓いを催促され、助力を請われる
が、リューデゲールはそれだけは容赦願いたいと答える。ギーゼルベルは娘婿
となる人でもありからである。とはいえ、王妃に誓った誓いもないがしろにす
ることはできない。ここに至ってリューデゲールはこのうえない苦境に陥るの
である。

So schwer, wie ich, ward noch kein Mensch geprüft,
Denn was ich tun und was ich lassen mag,
So tu ich bös und werde drob gescholten,
Und laß ich alles, schilt mich jedermann. (5261-4)

私のようにつらいことを経験した人はおりますまい。
私は何をしても、また何もしないでいても、
悪いことをしたこととなり、ひどく咎められるのですから。
すべてを見捨てても、私は皆に咎められるのです。

この苦悩は「ニーベルンゲンの歌」における同様の場面の苦悩（2153-4）に由来するものであろう。両族の板挟みとなって嘆くリューデガールは、もはや破滅を覚悟してプルグント族に立ち向かうしかいない。『ニーベルンゲンの歌』においても同様、リューデガールは家来を引き連れてプルグント族と戦う。『ニーベルンゲンの歌』においてリュエデガールはゲールノートと相討ちで倒れてしまう（2221）が、このヘッベルの戯曲ではリューデガールはダンクヴァルトと相討ちで倒れる（5401）こととなっている。この戦いでゲーレノートもギーゼルヘアも倒れてしまうが、この二人が誰によって倒されたかは明らかにされていない。いずれにせよも今やプルグント族側で生き残っているのはゲンター王とハーゲンの二人だけである。

この二人を捕らえてクリームヒルトに引き渡す役目を果たす人物が、『ニーベルンゲンの歌』においてと同様にディートリヒである。ただこのヘッベルの戯曲ではディートリヒはかなり加筆を施されて、エッツェル王に死ぬまで奉仕する人物として描かれている。武術の師匠ヒルデプラントから「エッツェル王に誓っていた七年の奉公の期限はすでに過ぎている」（5343-4）と言われても、ディートリヒはエッツェル王に向かって次のように自らの立場を明らかにする。

一定程度、mine Herr und König,
Doch weiß mein alter Waffenmeister nicht,
Daß ich's im stillen neu beschworen habe,
Indem er sprach, und diesmal bis zum Tod. （5346-9）

・・・その通りでございます、わがご主人の国王様。
しかし、私の武術の師匠は話しているうちに、
私が静かに改めて誓ったということを
知らないのです。このたびは死ぬまでの奉公と誓ったのです。

このように自らの立場を明らかにしてディートリヒは、参戦を決意し、しまいにはゲンター王とハーゲンを捕らえてクリームヒルトに引き渡すのである。こうしてついに仇敵ハーゲンを目の前にしたクリームヒルトは、まず財宝のあり
かを尋ねると、ハーゲンは『ニーベルンゲンの歌』においてとほぼ同様の返事をする。

Als ich den Hort versenkte, mußt ich schwören,
Ihn keiner Menschenseele zu verraten,
Solange einer meiner Kön’ge lebt. (5435-7)

財宝を沈めたとき、わしは誓ったのじゃ。
わしの国王様たちが一人でも生きている限りは、
誰にも財宝のありかは明かさないと。

この言葉を聞いたクリームヒルトは、密かに一人のフン族の兵士に命じて、ゲンターの首を刎ねて持って来させる。クリームヒルトがその首をハーゲンに見せて財宝のありかを催促すると、ハーゲンは自らが思っていた通りの結末になったことを喜びながら、次のように言う。

Da ist das Ende! Wie ich’s mir gedacht!
Unhold, ich hab dich wieder überlistet,
Nun ist der Ort nur Gott und mir bekannt,
Und einer von uns beiden sagt’s dir nicht. (5444-7)

さあ、結末じゃ！わしの考えていた通りになったぞ！
鬼女よ、わしはまたお前の裏をかいてやった。
今やそのありかを知るのは神とこのわしだけじゃ。
我々二人のうちどちらもお前にそれを教えはしない。

最後まで抵抗するハーゲンのこの言葉が『ニーベルンゲンの歌』最終場面におけるハゲネの同様の言葉（2371）に由来するものであることは、もはや言うまでもあるまい。ハーゲンのこの反抗的な言葉を聞いたクリームヒルトは、ハーゲンの腰からパルムクの剣を取り上げて、それでもってハーゲンを斬り倒した。この惨い仕打ちに怒ったヒルデブラントはクリームヒルトを成敗する。

『ニーベルンゲンの歌』と同じ展開であるが、ヘッペルの戯曲ではそのあとの結末が著しく異なっている。エッフェル王はすべてのことに嫌気がさして、王位をディートリヒに譲る決意を述べるのである。するとディートリヒはエッ
ツェル王の申し出をしかと神の御名において引き受けることを承諾し、戯曲『ニーベルンゲン』三部作の最終幕が下りるのである。

結び

以上のように見てくると、ヘッベルの悲劇『ニーベルンゲン』三部作は主要な素材として中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』が用いられていることが明らかであるが、しかし、オトフリート・エーリスマンも指摘しているように、ヘッベルにとって大切なのはテクストに密接に依存することではなく、「テクストの精神からの作品化」11のである。ヘッベルは、すなわち、ところどころで改作を施しながら中世英雄叙事詩の「精神」を論理学的・心理学的に発展させたのである。言い換えるならば、彼はあらすじを首尾一貫して人間的に動機づけたと言えよう。それにもかかわらず彼の戯曲の中には現に「神話的土台」もあることは確かである。その神話的な人物の代表がジークフリートとブルンヒルトである。まずジークフリート像については、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』においてハゲネが語るジークフリートの英雄譚のほかに、北欧のエッダ・サガに伝承されている英雄譚を用いてジークフリート像を構築していると言えるが、しかし、もう一人のブルンヒルト像に関してはかなり自由な創作が施されて、ドイツの伝承にも北欧の伝承にも見出されない新たな要素が盛り込まれている。すなわち、ブルンヒルトは神々の住むヘクラの山から人の老人によって乳母フリッガに預けられた人物として登場し、彼女の顔にはルーネ文字が書き込まれており、彼女のすることが吉凶のしるしになったという。このブルンヒルトの魔力については、第二部『ジークフリートの死』第四幕第9場でハーゲンによっても語られている。ハーゲンはブルンヒルトがしくりにジークフリートの命を取りたいと思っている理由はゲンター王に推測して言うには、彼女の憎しみには恋というものがある2162-3が、しかしそれは男と女を結びつける恋ではない2164-5、それは「魔力」2165というものですので、彼女はその魔力によって自らの一族を保とうとしている2166という。そしてその魔力を解くものは死だけである2169と、ハーゲンは説明するのである。ジークフリート暗殺後のブルンヒルトについては、第三部『クリーム

ヒルトの復讐」第三幕第1場で使者ヴェルベルによってクリームヒルトに報告されており、それによると、ブルンヒルトはジークフリートの墓所に入って（3815）、棺のそばにしゃがみ込んで（3820）、目には涙をいっぱいい溜め、爪で自分の顔や棺の板をかきむしったりしている（3821-3）という。このようなブルンヒルト像には北欧の神話・文学が作用していることは明らかである。ヘッベルの戯曲においてはどのようにジークフリートとブルンヒルトの二人は純粋に人間的な世界を超越しており、『ニーベルンゲンの歌』とは別の新しい次元にあると言ってもよいであろう。

このジークフリートとブルンヒルトの「神話的時代」に対立しているのが、ハーゲン、ゲンター王、クリームヒルト及びエッフェル王に代表される「異教的時代」とディートリヒ及び司祭によって具象化されている「キリスト教的時代」である。ヘッベルの作品ではこの三つの時代が衝突・対立している点で、ヘッベルは中世英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の単なる翻訳者ではなく、それ以上の中存在である。そして否定されえないことは、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』においてよりもキリスト教の特徴をより強くしているということである。そのことは第三部『クリームヒルトの復讐』第四幕第20場で一人の巡礼者が登場していることからも明らかである。すなわち、その巡礼者は以前は「立派な公爵」であったが、今は乞食の姿で歩き回って、贖罪者の生活を送っているという役柄である。また司祭にもキリスト教的なものが強調されている。『ニーベルンゲンの歌』では第25歌章でしか役割を演じていないその司祭は、ヘッベルの戯曲ではすでに第二部『ジークフリートの死』において登場している。第四幕第8場において司祭は王妃の母にキリスト教の教えを告げ、いかにして異教徒の彼が突然キリスト教に改宗して僧侶となったかについて語っているのである。そして彼はそのあと第五幕第9場でクリームヒルトに向かって「十字架で救した人のことを考えてごらん」と言って、復讐を断念させようと努めているのである。しかし、この巡礼者と司祭以上にヘッベルがキリスト教的なものを強調しているのはディートリヒという人物においてである。この人物は『ニーベルンゲンの歌』においても理想的な人物として描かれているのが、ヘッベルは『ニーベルンゲンの歌』にもましてこのディートリヒをキリスト教的な支配者として描いていると言える。すなわち、第三部『クリームヒルトの復讐』最終場面（第五幕第14場）で、エッフェル王は自らの国をディートリヒに委ねてこう言う。「ディートリヒ殿、この身の冠をお取りください。そして貴殿がこの世を背負っていてくだされ」この言葉に対してディートリヒは三部作最後の言葉として「十字架に消えたる者の名代として、承知いたした」と
答えるのである。これは『ニーベルンゲンの歌』とはまったく異なる結末である。ヘッヘルの戯曲は破局に終わるのではなく、異教に対するキリスト教の勝利に終わっていると言ってもよく、作者はここで「歴史は破滅を越えて再三再四新しい意味深い世界へと進む」12）ということを確信しているのであり、ここにヘッヘルのニーベルンゲン世界の特質があると結論づけることができよう。